

近世城郭における「廊下橋」考

～城郭史研究の視点から見る、本丸・天守へ続く不思議な橋～

福永素久

はじめに

城郭には、曲輪と曲輪の間には様々な橋が架けられている。その中で橋の上に屋根や櫓を設けた廊下橋が存在する。城郭建築としての廊下橋の機能は、橋の廻りに壁や狭間を設けることで、防御能力を高めたものとされてきた。今まで城郭史研究において、天守や多聞櫓など城郭建築がクローズアップされてきたが、廊下橋に対して検討されることがあまりなかった。筆者（福永）は平成21（2009）年10月に大分へ旅行に行った際、佐伯城跡で山上の本丸と二の丸との間に、廊下橋が架けられていた事に気付いた。佐伯城も含め、近世城郭は、元和元（1615）年の一国一城令や公儀の諸政策の下、本丸や天守の機能が形骸化してきたと言えるだろう。そこで、廊下橋を素材として、近世城郭における本丸や天守の存在意義について、ふと検証しようと筆者は考えた。その中で、廊下橋を防御的側面と儀礼的側面の2つの視点に置いて検証することにする。

日本各地には、近世城郭を中心に数多くの「廊下橋」の名称がつく橋が存在する。会津若松城（福島県）や彦根城（滋賀県）のように、「廊下橋」があるが橋の上に屋根などの構造物が存在しない城もある。したがって、今回検討するにあたり、①橋状の構造物であること②今は現存していないものの、かつて橋の上に塀・屋根が付けられているもの③絵図・古写真等から①②のような構造として、描かれているものとし、3つの条件にあてはまる事例から検討するものとする。

1、廊下橋の変遷と各事例の検討

（1）変遷

「廊下橋」は、鳥羽正雄著『日本城郭辞典』によると⁽¹⁾、「橋の上に屋根を付け、両側を壁で覆い、狭間などを付けたもの」とされている。また中世の山城には、通路や坂道に塀を覆い、内部の通行を外部から見えにくくする「廊下^{しどみ}」があった。

元々、城郭建築以外で廊下橋を設けたのは、神社であった。大分県宇佐八幡宮にある呉橋や、広島県厳島神社にも拝殿や本殿の間にかかる廊下に、廊下橋が架けられている。宇佐神宮の呉橋は、既に応永年間（1394～1427年）までには架けられており、「応永古図」には橋の上に屋根が付けられている。現在残っている橋は、元和8（1623）年に当時小倉藩主であった、細川忠利によって寄

進されたものである。

このように主に、神社建築として使用された廊下橋が、城郭建築として利用した例として、織田信長により築城された安土城(滋賀県)とされている。平成11(1999)年から平成12(2000)年にかけて、本丸跡を中心に行われた発掘調査で、大規模な御殿と共に、天主へ続く取付台が検出された⁽²⁾。また天主取付台付近では瓦が検出されており、瓦葺きであった可能性がある。安土城については、後述で検討してみるが、本丸御殿が朝廷の清涼殿と酷似している点は、先行の研究で指摘されている。天皇が安土に行幸する事を、想定した造りとなっており、信長自身が住む天主との間を繋ぐ廊下橋が存在していたことが窺える。コンピューターグラフィック(CG)によって、天主と本丸を結ぶ廊下橋が再現されている。

また、豊臣秀吉も大坂城において「廊下橋」を用いた。近年オーストリアのエッケンベルク城で再発見された、「大坂城図屏風」には、本丸西側に「極楽橋」として廊下橋が描かれている。「極楽橋」は、慶長5(1600)年まで、屏風にある位置に存在した。この「大坂城図屏風」は、築城当初の大坂城の様相が窺え、貴重な資料である。

このように、神社建築としてスタートした「廊下橋」が、信長や秀吉によって城郭建築として、利用された。しかし、織豊期において城郭建築として利用された例は、安土城と大坂城も含め少ない。佐竹義宣が文禄3(1690)年に堀之内大台城(茨城県)を築城した。昭和59(1984)年の発掘調査では廊下橋が確認された⁽³⁾。主郭虎口部分にあり、入り口付近は枡形である。また、廊下橋が架かっていた堀底は道となっており、櫓門の原型ともなったという考えもある。会津若松城も蒲生氏郷が文禄元(1592)年に改修した際、廊下橋が造られた。後に、伊予松山から加藤明成が入部した際、普通の橋に付け替えられた。その後慶長5年の関ヶ原合戦以降、各地に築城された城郭に「廊下橋」を使用した大名の居城が見える。

(2) 各事例の検討(図1)

①盛岡城(岩手県盛岡市、図2)

盛岡城は南部信直が、慶長2(1597)年から元和3(1617)年にかけて、築城した。東北地方では珍しい総石垣の城郭である。以来、近世を通して外様の盛岡藩南部氏の居城だった。

廊下橋は、本丸と二の丸の間に架けられていた。江戸初期に描かれた「正保城絵図」(以後「正保図」⁽⁴⁾)によると、廊下橋は描かれていないが、他の「盛岡城絵図」には⁽⁵⁾、廊下橋の構造を持った箸が描かれている。この絵図によると、橋の上に付けられている屋根は、周囲の櫓や塀の屋根とは別の色で、描かれている。よって、板葺きかひわだ葺きなど、屋根瓦以外の素材を使用していた可能性が高い。廊下橋を経て本丸側には、一重の多間櫓と城門が配置されている。

②会津若松城(福島県会津若松市、図3)

蘆名氏の居館である「黒川館」から発し、天正17(1589)年には伊達氏の居城となった。その後、蒲生氏郷が入城し、高石垣と七層の天守をもつ、城郭に改修した。慶長12(1611)年の大地震で損

傷した。その後、慶長13（1612）年と加藤明成が入城した後、寛永16（1639）年に改修され、現在の姿となる。城主はその後、保科氏となり、譜代会津藩として明治維新まで続いた。

廊下橋は、二の丸と本丸の間に付けられていた。現在の廊下橋付近では、本丸両サイドに櫓台があり、横矢となっている。しかし廊下橋の性格上、橋の上に屋根や塀で覆われているため、横矢から橋に向けて攻撃しても、効果が薄い。現在の縄張りは加藤氏による改修によるもので、その際にも通常の橋に付け替えられている。一方で「会津城図」⁽⁶⁾は、元和7（1621）年の蒲生忠郷時代の若松城を表したものである。「会津城図」によると、廊下橋付近に今の縄張りにあるような、横矢は見られない。この絵図が正しければ、廊下橋としての意義があるものと考えられる。実際に「正保図」からも、廊下橋が描かれている。

「会津城図」では、廊下橋をわたった本丸側の虎口は、内柵型となっている。北へ右折し、櫓門を通り本丸へ抜けるように描かれている。現況からも蒲生時代の虎口を継承していると考えられる。虎口には多聞櫓と廊下橋門に囲まれ、北側の廊下橋門を通り本丸へ抜けるようになっている。

③福井城（福井県福井市、図4）

福井城は、徳川家康の次男結城秀康が、織田信長家臣柴田勝家の居城のあった、北ノ庄城跡に築いた。秀康の子忠直が改易されたものの、以来、譜代の福井藩松平家の居城となった。

廊下橋は、本丸大手口より西側で、二の丸と本丸を繋いでいた。搦手口に相当する部分である。寛文年間（1661～72）に作成された、「御城下絵図」⁽⁷⁾にも描かれている。他の絵図では、橋の屋根の部分、周囲の櫓・塀と比べて色が異なり、さらに古写真から、屋根瓦以外の素材を使用していた。明治以降、廊下橋は屋根がないまま、再建された。その後、平成20（2008）年に、福井県により復元整備され、本来の廊下橋に近い橋が復元された。

本丸大手口が内柵型虎口に対し、廊下橋が架けられている虎口は、外柵型となっている。また、廊下橋より渡ってすぐ脇（北側）は、天守となっている⁽⁸⁾。天守は寛文9（1669）年に消失している。消失後も廊下橋が存在していた。

④大垣城（岐阜県大垣市、図5）

大垣城は、豊臣政権に入ると一柳直末・伊藤祐盛が入り、近世城郭に改修された。慶長5（1600）年に関ヶ原の戦いでは、祐盛の子盛宗が西軍に属し、後に笹尾山で戦死した。西軍に明け渡された大垣城は福原長堯が籠城し、徳川方との激戦の末、落城した。関ヶ原以降は石川氏を経て、寛永12（1635）年に戸田氏鉄が摂津尼崎から10万石に入部し、以降明治まで戸田家が城主を務めた。一方で、将軍が上洛する際の宿所としても利用された⁽⁹⁾。

廊下橋は、南側の二の丸から本丸の間に架けられていた。虎口は平入りで、本丸腰曲輪に接続する。「正保図」では、廊下橋が描かれており、屋根が天守や他の城郭建築とは異なる表現で、描かれている。おそらく瓦以外の素材を用いたと考えられる。

⑤桑名城（三重県桑名市、図6）

桑名城は、天正19（1591）年に一柳直盛、文禄4（1595）年には氏家行広が入城した。関ヶ原の

戦いの後、本多忠勝が10万石として入城し、10年もかけて城郭を整備した。その後、元和3(1617)年に松平(久松)定勝が、宝永7(1710)年に松平(奥平)氏を経て、文政6(1823)年に松平(久松)氏が復し、明治維新に至っている。

「廊下橋」は、本丸南側にあった。「正保図」によると、廊下橋は「ろうか橋 長さ十壱間(約20m) 幅二間(約3.6m)」と表記されている。また、周囲の城郭建築物と同じ屋根瓦と漆喰の壁で造られたと思われる。橋を経て本丸側は、外柵型虎口となっている。また、虎口の大きさは、「正保図」によると、東西11間(約20m)・南北5間(約9.1m)となっている。虎口の周りは三重の隅櫓と櫓門に囲まれている。天守は元禄14(1701)年に火災によって焼失したが、廊下橋は明治維新まで存続した。

⑥安土城(滋賀県安土町、図7)

織田信長が天正4(1576)年から天正7(1579)年に、安土山に完成させた。天正10(1582)年に起きた、本能寺の変直後に天主(守)が火災により焼失、廃城になった。

本丸から伝名坂邸跡(三の丸)に、廊下橋が付けられていたと、木戸雅義氏が指摘した⁽¹⁰⁾。実際の発掘調査によると、本丸取り付け台では、礎石と瓦片が散布しており、三の丸方向には、本丸東門と直結していた。このため、櫓門を介して廊下橋が本丸と三の丸の間にあったとしている。

ベルギーの画家、フィリップス・ファン・ウイングが安土城をスケッチした木版画が残されている⁽¹¹⁾(図7②)。これは現在行方不明になっている、信長がヴァチカン宮殿に送った「安土山図屏風」をスケッチしたものである。この木版画によると、天主の前に廊下橋と思われる建築物が描かれている。屋根の表現が、天主とは異なる表現で描かれている事から、瓦以外の素材である、桧や檜皮を用いた可能性がある。

本丸御殿は、一部内裏の「清涼殿」を模した構造となっている事が、近年の発掘調査で確認できた。これは、信長が天皇の行幸を迎えるために造られた、「御幸の間」であるとされる。実際に天皇を行幸させようとしたことや、「御幸の間」の存在が、「信長公記」⁽¹²⁾やルイス・フロイス「日本史」⁽¹³⁾からの記述からも窺えられる。

⑦膳所城(滋賀県大津市、図8)

関ヶ原の戦い後の慶長6(1601)年に、大津城に代わり築城された。初代城主は戸田一西を入れた。その後本多氏・石川氏を経て、慶安4(1651)年以降譜代の本多氏が城主を務めた。

廊下橋は二の丸から本丸の間に架けられていた。「正保図」からも確認でき、「廊下橋拾五間(約17.9m) 径弍間(約2.4m)」と記されてある。寛文2(1662)年の大地震で大破すると、大規模な改修が行われ、本来西側にあった二の丸が本丸の広がりと共に消滅し、南側に二の丸を新設した。これにより「正保城絵図」に描かれた、廊下橋は取り壊されたが、新たに南側に設けた二の丸との間に、廊下橋を設けた。

震災前の旧廊下橋の本丸側虎口は内柵型であり、天守から続く付櫓に囲まれている。南側の櫓門を通り、本丸へ抜けるようになっていた。寛文2年の大地震以降に新たに設けた廊下橋の本丸側虎

口は、旧二の丸南側虎口を踏襲した外枡型で、新たに虎口両サイドに櫓を設けていた。

⑧彦根城（滋賀県彦根市）

関ヶ原合戦後の慶長8（1603）年に、井伊直政と直継親子が、石田三成の居城だった佐和山城に代わる居城として築城された。築城の際に長浜城や佐和山城の櫓や門の一部を移築したことは、知られている。

廊下橋は、出曲輪から本丸へ直結する西の丸に架けられていた。西の丸側には天秤櫓がある。廊下橋の存在は、創建当初からあったと、最近の研究で明らかになった⁽¹⁴⁾。しかしどのような形態であるかは、いつから木橋になったかは不明である。

⑨徳川期二条城（京都府京都市、図9）

徳川家康が、慶長6（1601）年に築城した。その後、3代将軍家光により、大規模な改修がされている。以来、将軍が上洛する際の宿所として用いられた。寛延3（1750）年に落第により天守が焼失した。また天明8（1788）年にも大火によって、二の丸御殿（国宝）以外の殆どの建物が、焼失した。

廊下橋は石垣に覆われた土橋の上に建っており、二の丸から本丸へ繋いでいた。二階建ての構造にあっていて、本丸側は内枡型となっており、櫓門を経て本丸へ進入するようになっている。また、土橋上になっているため、周りの城郭建築物と同じように、屋根瓦と漆喰の壁を用いられている⁽¹⁵⁾。創建時の二条城を描いた「洛中洛外図屏風（池田家本）」では、廊下橋は描かれていない（図9①）。二条城は家光の寛永期による改修と、貞享3（1686）年～宝永7（1710）年の2回にわたって、大規模な改修を行われた。おそらくこの2つの大規模な改修が行われた頃に、廊下橋が創建されたのであろう。

⑩豊臣期大坂城（大阪府大阪市、図10）

天正13（1585）年頃に、石山本願寺の跡地に羽柴（豊臣）秀吉が築城した。慶長20（1615）年に大坂の陣で、落城するまでの間、豊臣政権の中核の一つとして機能していた。

「義演准后日記」慶長5（1600）年5月2日の項によると、大坂城の架けられていた「極楽橋」とよばれる二階建ての橋が、豊国神社の楼門として移築されたとある⁽¹⁶⁾。この極楽橋が廊下橋であると考えられていたが、その実態は不明であった。ところが、第1章で述べたように、オーストリアのエッケンベルク城で「大坂城図屏風」が再発見された事により、「極楽橋」の実像が少しづつ明らかになっていきている⁽¹⁷⁾。

まず、橋中央部分が二階建てになっており、二階部分は檜皮葺の屋根になっていた。一階部分の屋根は瓦葺きになっており、壁はおそらく漆喰を用い壁面には、極彩色に絵が描かれている。橋を渡り、櫓門を経て本丸へ進入するように描かれている。

「極楽橋」は、豊国神社へ移築以降その一部は、竹生島にある宝厳寺唐門として移築されたとされている。

⑪篠山城（兵庫県篠山市、図11）

関ヶ原の戦いの後に、徳川家康が大坂城包囲網の一つとして、篠山盆地に築城した。藤堂高虎の縄張りの下、西国の大名たちによる天下普請で、慶長14(1609)年に完成した。松平(松井)康重が初代城主となり、元和元(1615)年以降、松平(藤井)氏・松平(形原)氏と松平三家続いた。その後寛延元(1748)年以降は、青山氏と譜代が城主となり、明治維新まで続いた。天守は築城当初から建てられていない。

廊下橋は、北側の大手虎口と南側の搦手虎口にあった。それぞれ、石垣によってできた土橋状の上に構造物があった。「正保図」によると、大手虎口は北側の大手馬出しを経て、本丸へと進入する形をとっており、本丸へは直線的に進入できない構造となっている。また入口両サイドには、石垣に覆われた、小さな曲輪に通路が挟まれており、厳重である。これは、搦手虎口も同様の構造となっている。搦手側は現在破壊されて存在しない。また両虎口とも、本丸側に櫓門と多聞櫓が備えていた。大手虎口の本丸側は、外柵型の連続した虎口になっている。一方で搦手虎口は埋門うづめもんとなっている。享保3(1718)年に作成された「丹波国篠山城石垣破損絵図」⁽¹⁸⁾には、廊下橋は周囲の城郭建築物と同じように、屋根瓦と漆喰の壁を持つものとして、描かれている。これは、「正保図」にも同様に描かれており、他の城郭建築物と同じような素材を用いて、廊下橋が建てられた事を表している。

⑫和歌山城(和歌山県和歌山市、図12)

天正13(1585)年羽柴秀吉が、雑賀攻めの後紀州を領有した、弟秀長の居城として岡山に築城した。縄張りは藤堂高虎が実施した。秀長は居城の大和郡山城を拠点に支城として、桑山重晴を城代に置いている。慶長6(1601)年に関ヶ原合戦の戦功により、浅野幸長が和歌山城に入城した。大規模な改修を行った。その後、元和5(1619)年に、浅野氏の広島移封に伴い、徳川頼宣(徳川家康10男)が入城した。以来、御三家の一つとして、明治まで至っている。

廊下橋は「御橋廊下」として、山上部分ではなく麓の三の丸と西の丸東側に架けられていた。徳川時代に麓の西の丸と、砂の丸が大規模に改修された事から、その頃に架けられたと思われる。現在は、発掘調査後廊下橋が復元されている⁽¹⁹⁾(図12②)。

⑬松江城(島根県松江市、図13)

関ヶ原合戦の後、出雲を領した堀尾吉晴が、慶長12(1607)年に、かつての戦国大名尼子氏の居城だった月山富田城から移転してきた。その後京極氏をへて、松平氏が城主となり、明治に至っている。

廊下橋は、廊下橋は二の丸と三の丸の間に架けられていた。「正保図」からは石垣を用いて土橋状に水堀の上で架けられている。屋根は、周囲の城郭建築とは異なる色で描かれていることから、瓦以外の素材を用いたと窺えられる。二の丸からは本丸へ直結する一二三段と呼ばれ、平山城として理想の縄張りとしてされている⁽²⁰⁾。

⑭高松城(香川県高松市、図14)

生駒親正が、秀吉による四国征討の後の、天正16(1588)年に築城した。瀬戸内海に面した平城

である。寛永17（1640）年の生駒騒動により、生駒氏が改易された後、譜代の松平頼重が讃岐東部12万石として、入城した。以後松平家が明治維新まで続いた。

生駒氏の改易以前に描かれた「高松城下図屏風」⁽²¹⁾には、二の丸と本丸との間に廊下橋が描かれていない。廊下橋が架けられたのは、松平氏の入部後の寛文11（1671）年による改修である。本丸側は虎口には櫓門（中川櫓）があり、中櫓と連結している。二の丸と比べ、本丸は空間が非常に狭いことが「高松城図」でわかる。廊下橋（鞆橋）は明治維新以降に取り壊されたが、天守台に玉藻神社（現在は移転している）を建立した際、廊下橋が再建され現在に残っている。

⑮高知城（高知県高知市、図15）

関ヶ原の戦いにより、土佐を領した山内一豊が慶長6（1601）年に、かつて長宗我部元親が築城した、大高坂山城を改修して築かれた。以来土佐二十四万石の外様山内家の居城として、明治まで至った。

廊下橋は現存しており、二の丸と本丸の間に架けられ、一階は詰門で二階が廊下橋という構造になっている。二の丸と本丸はそれぞれ独立しており、間が空堀となっている。空堀の上に、廊下橋がかかる構造は、堀之内大台城（2章（1）参照）や盛岡城にもみられる。また廊下橋部分は家臣の詰所にもなっており、本丸へは埋門を経て進入し、天守のすぐ脇に現存している。

⑯府内城（大分県大分市、図16）

豊後の戦国大名大友義統の改易以降、慶長2（1597）年に、石田三成の妹婿にあたる福原直高が、12万石に入ってきた。直高は当初使用していた、大友館から新たに、大分川河口付近で築城したのが府内城である。その後竹中重利が関ヶ原の戦い以後、豊後高田から3万石で入部し、日根野氏を経て松平（大給）氏が入り、明治まで譜代松平家の居城となった。天守や城内の大部分は、寛保3（1743）年に火災により焼失した。その後廊下橋も含め、櫓や建物が再建された。一方で天守は再建されなかった。

廊下橋は、府内城内に3箇所設けられていた。現在は山里丸から二の丸に繋いだ廊下橋が復元されているのみである。

①山里丸（北）から二の丸に架けられていた廊下橋は、「正保図」によると、長さ11間（約19.8m）・横1間（約1.8m）、水面より高さが1間と描かれている。二の丸側は内柵型虎口となっており、現在も高さ1mくらいの土塁が現存している。

②南側の城下（侍町）から二の丸へ入る所にある、「正保図」では廊下橋は長さ8間（約14.4m）・横2間（3.6m）、水面よりの高さが1間として描かれている。二の丸側は、外柵型虎口となっており、図中左（西）へ曲がり櫓門をへて進入するようになっていた。

③二の丸南側から、本丸へ繋げる間に設けられており、府内城にある廊下橋では最も小さい。「正保図」では、長さ3間（約5.4m）として描かれている。二の丸と本丸の比高差がある。そのため、本丸側は虎口が平入であるが、櫓門が埋門になっていた。

この3つの廊下橋は、「正保図」では屋根瓦とは違う表現で描かれている。桧か檜皮葺きの屋根

であった可能性がある。実際に復元された、山里丸側の廊下橋の屋根は、桧葺きになっている。

⑰佐伯城(大分県佐伯市、図17)

慶長6(1601)年に、毛利高政が日田から2万石で佐伯に入封した際、八幡山に築城した。寛永14(1637)年に、三代藩主高尚が三の丸を整備し現在に至っている。宝永6(1709)年～享保13(1728)年の約20年間にわたって、六代藩主毛利高慶により、山城部分を中心に大規模な修築作業を行い現在に至っている。

廊下橋は、山城部分に建てられた。二の丸と天守曲輪の間に架けられていた。現在は建物自体残っていないが、幅が2.5mと長さ4～5mの間に架けられていたと考えられ、小規模であった事が窺えられる。当初天守曲輪には、三重の天守が建てられていたが、元和三(1617)年に焼失している。その後宝永から享保に架けての修築でも、再建されなかった。修築後の元文3(1738)年の絵図⁽²²⁾や、明和7(1770)年に幕府へ提出した「豊後国佐伯城破損之覚」に付いていた図面⁽²³⁾にも、廊下橋が描かれているものの、天守が再建されなかった。

⑱島原城(長崎県島原市、図18)

松倉重政が、元和4(1618)年に日根野城に代わって築城した。しかし、寛永14(1637)年に起きた島原の乱で、子の勝家が責任を取り改易となって以降、高力高房を経て、寛文9(1669)年に松平(深溝)忠房が入り、寛延2(1749)年に下野宇都宮の戸田氏と交代し、安永3(1774)年に再び松平氏に復した。

島原城の縄張りは、本丸と二の丸とそれぞれ独立した構造となっている。廊下橋は二の丸と本丸の間に「廊下橋門」として、架けられていた。「嶋原城廻絵図」⁽²⁴⁾によれば、本丸の石垣の高さが水面から5間に対し、二の丸側が水面から4間と約1.8m～2m程本丸が高いことがわかる。つまり、廊下橋は傾斜があった事が窺えられる。廊下橋をへて本丸へは、連続した枡形虎口を経て進入するようになっていた。

以上のように、各事例を、みてみると会津若松城と盛岡城・大垣城を除いて圧倒的に西日本の城郭に多いことがわかる。城主は御三家をはじめ譜代大名から外様大名まで様々である。屋根として用いられた素材は、「正保図」をはじめ絵図で描かれているのをみると、屋根瓦以外の素材を使われている事例が多い事が、窺えられる。水堀の上に廊下橋を設けることで、重い瓦を用いることはかえって重心の関係上、バランスを考慮したのかもしれない。一方で、土橋状に架けられた廊下橋は、橋脚部分が安定しているため、屋根瓦を用いられている。瓦以外の素材では、檜皮葺・こけら葺・板葺などと考えられる。

次に、虎口との関連は、ほとんどの事例に櫓門が配置されている。さらに櫓門から直接平入りで、進入するパターンと埋門となっているケースがある。さらに虎口には、枡形をはじめ様々な仕掛けをしている事例も多いことが、窺える。中には篠山城や島原城のように、廊下橋を抜けた後、連続した枡形虎口を経なければ本丸に侵入できないケースもある。

さらに特筆すべきは、天守や本丸の建物が火災や地震などにより焼失して以後、それらの建物が

再建されなかった。それにも関わらず、改修も含め本丸に架かる廊下橋が再建されるケースがある（事例として、福井城・桑名城・膳所城・二条城・高松城・府内城・佐伯城）。

2、考 察

近世城郭において、廊下橋はどういった存在だったのであろうか。そこで、防衛的側面と儀礼的側面の2つの点に注目して、考察したい。

まず防衛的な側面として、堀之内大台城の事例のように、廊下橋が城の防衛機能としてからの点であろう。そこで、府内城（大分県）に現在復元されている事例を検討して見ることにする（図16②）。復元されている廊下橋は、二の丸から三の丸（山里丸）に架けられている橋である。内部は、窓がやや下よりに配置されているせいか、全体が暗い。二の丸に出るとすぐに高さ1m程の土塁が枡形として控えている。さらに、二の丸側入り口すぐ脇は、隙間があり堀側に塀を築くと、奥行き1m程の武者隠しになる。

高知城（高知県）の詰門の場合はどうだろうか。詰門の前は、二の丸へ続く階段となっており、さらに詰門を渡った本丸側では天守台が前方に張り出している。敵が二の丸に進入する際、天守に背を向けて入ることになるので、天守から背後へ攻撃を受けることになる。さらに、正面には詰門があり二階部分の廊下橋側からの攻撃を正面からもろに受けることになる⁽²⁵⁾。

廊下橋を設けている城郭では、入り口には櫓門や枡形虎口を配置している事例が多い。府内城のように、橋内部が全体的に暗い。暗く狭い空間は人間にとって圧迫感を与える。しかも、付けている窓によって、外から中の動きが見える。そしてようやく抜けたところで、前方に枡形の土塁・石垣と櫓門が控えているという仕組みになる。廊下橋はこういった心理的効果をねらっていたのかもしれない。中には、高知城のように外へ向けて攻撃するケースもある。高知城や盛岡城のように、廊下橋が架かる空堀は通路となる場合が多い。そこでその通路へ入ってくる敵に、橋から攻撃を仕掛ける事もできる。高知城や盛岡城など、空堀の上に架かった廊下橋は、堀之内大台城の流れを組んだものといえるだろう。

もう一つ、儀礼的な視点からはどうだろうか。先程も述べたように廊下橋の屋根に使用された素材は、瓦以外の素材で用いられている事例が多い。檜皮葺やこけら葺は主に、御殿に使用された。『洛中洛外図屏風（歴博甲本）』の中でも、室町將軍の「花の御所」や管領である細川氏といった、幕府高官の屋敷にも使用されていた⁽²⁶⁾。府内城に復元されている、廊下橋も屋根が檜皮葺になっている。もちろん、板葺になっている事例もあるが、絵図に見る限り、瓦や板葺き以外の素材で用いられている事が窺えられる。では、廊下橋の屋根になぜ、本来御殿に使用される素材を用いたのだろうか。また、焼失後も再建されたのか。それは、近世城郭における本丸と天守の存在意義に、深く関わっているものと考えられる。

佐伯城（大分県）は、宝永6（1709）年～享保13（1728）年の約20年間にわたって、山城部分

を中心に大規模な修築作業を行った⁽²⁷⁾。その際、天守は再建されず、山上部の石垣が積み直され、本丸には櫓と塀が再建されるにとどまった。一方で、二の丸と天守曲輪に架かる廊下橋は再建されている。

宝永6年7月23日には、天守台で斧初めの儀式が行われた⁽²⁸⁾。そして同年9月16日には、本丸にて地鎮祭が行われている⁽²⁹⁾。この佐伯城の修築を考察した、白峰句氏は作事の儀式を本丸を用いたことに関して、「天守は存在しなくても、天守台は本丸の中心であり、今回(修築)の祝儀の儀式の場として天守台を使用していることは、天守台の存在意義を考える上で重要である。」と指摘している⁽³⁰⁾。

近世城郭特に一国一城令以後において、本丸・天守の実質的な機能は形骸化してきたと言えるだろう。本来、本丸が果たしていた機能は、二の丸など政務上便利な場所に移った。そして、天守も織豊期以降重宝されたが、近世以降は、一国一城令との政治的な関連も含め、不要となる存在になっていた。ところが、本丸・天守台は従来果たしていた機能としては失われても、場所自体儀礼的な存在であったと言えるだろう。本丸(主郭)は、中世城郭においても儀礼の場として使用されてきた⁽³¹⁾。それが近世においても引き継がれている事が、佐伯城の事例からも窺えられる。

その中で、廊下橋は本丸・天守との関連の中で儀礼的な一面をもつと言える。天守や本丸内部が焼失し再建されなくても、廊下橋が再建される事例が多い事からも考えられる。そこで、屋根を瓦以外の檜皮やこけら等の素材を使用することで、本丸・天守を城のメンタル面(その城としてのアイデンティティも含む)として、存在の意義を確立しようとした狙いがあると窺えられる。

おわりに

今回、廊下橋を城郭史研究の点で検討する事にした理由として、近年の城郭研究の流れと関連するものだと考えた。今まで特に最近10年間、城郭研究は飛躍的に発展してきた。また一昨年からの歴史ブームにより、お城に関する本の出版や、お城へ訪れる一般人も増えてきた。このように、お城への関心が高まる中で、各地ではお城に関するシンポジウムや講演会がさかんに行われてきた。その内容は、その地域にあるお城に関連することや、織豊系城郭から石垣などのパーツ論などが、テーマとして取り上げられている。一方でこれらは、中央の研究会等で10年以上前からさかんに議論されてきた内容ばかりである。従って、限りあるお城の中でそれ以上議論が展開されていなかった感がある。

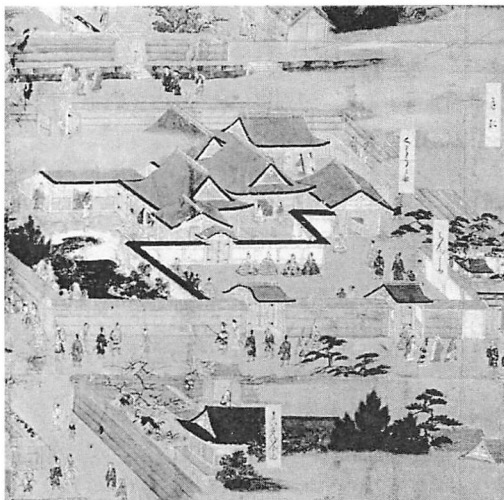
そこで、近世以降本丸や天守が、一国一城令や公儀による諸政策による合理化の下、従来果たしていた機能が形骸化していった。そのような中、本丸や天守の存在意義という、本質的な問いを問うために廊下橋を用いて検証してきた。そこで、防御的側面と儀礼的側面の2つの視点で考察してきたが、近世初頭の段階で廊下橋は、防御的側面が強かった事がいえるだろう。一方で、途中火事や災害によって、天守や本丸内部の主要な建物が焼失しても、廊下橋が再建される事例が数多くあ

ることから、近世後半前後から儀礼的側面が強くなった。その意味は、本丸が形骸化しても、お城そのもののメンタル面としての役割を果たそうとした意図がみえる。廊下橋はその意義を確立するための、素材の一つだったといえるだろう。よって、廊下橋は近世以降の本丸・天守の在り方を問う上で、貴重な資料と言えるのである。

【注】

- (1) 鳥羽正雄『日本城郭辞典』、東京堂出版、1971年
- (2) 『特別史跡 安土城発掘調査報告書』Ⅱ・Ⅲ、滋賀県教育委員会、2008年・2009年
- (3) 日本城郭史学会調査報告第3集『堀之内大台城発掘調査概報』、日本城郭史学会・牛堀町教育委員会、1985年
- (4) 『正保城絵図』内閣文庫所蔵、国立公文書館、1976年。以下本論において各事例での検討する際に使用した、「正保城絵図」（以下、本論中では「正保図」）はことわりのない限り、こちらを利用した。また、一部は国立公文書館ホームページ（URL <http://www.digital.archives.go.jp/>）で閲覧可能。「正保図」において、堀や石垣と同様、廊下橋も寸法が記入している事例もあったが、記入がない事例もある。したがってこの部分についての公儀の基準は、定まっていなかったものと考えられる。
- (5) 盛岡市中央公民館所蔵
- (6) 個人蔵
- (7) 「福居御城下絵図」（サイズ：282cm×317cm、『福井市史』資料編別巻 絵図・地図、福井市史編纂室、1989年所収）は、貞享2（1685）年作成されたもの。
- (8) 天守台は西側（廊下橋が架かっている堀の方向）に張り出しており、横矢が掛かっている。
- (9) 『復元大系日本の城』4 東海、ぎょうせい、1993年
- (10) 木戸雅義『よみがえる安土城』歴史文化ライブラリー 167、吉川弘文館、2003年
- (11) 加藤理文「文献に見る安土城の姿」『よみがえる真説安土城－徹底復元霸王信長の幻の城』歴史群像シリーズデラックス2、学習研究社、2006年
- (12) 太田牛一著・桑田忠親校注『信長公記』、新人物往来社、1962年
- (13) 松田毅一、川崎桃太訳『完訳ルイスフロイス日本史』織田信長編、中央公論社、2000年
- (14) 『新修 彦根市史』、彦根市刊行、2001年
- (15) 『復元大系日本の城』5 近畿、ぎょうせい、1992年
- (16) 慶長五年五月十二日条「次豊國明神ノ鳥井ノ西二、廿間斗ノ二階門建立、大坂極楽橋ヲ被引了」とある。『義演准后日記』は、醍醐寺座主三宝院義演による日記。1596年から1626年まで書かれた。現存しているものは、1614年と1615年を除いたもの。本論では『義演准后日記』続群書類従完成会、1976年所収史料から引用した。
- (17) 佐藤大規「豊臣大坂城天守を描いた屏風に関する考察」『日本建築学会学術講演梗概集』、2006年
- (18) 篠山市立博物館・科学館篠山城大書院所蔵

- (19) 中井 均編「近世城郭と城下町」『季刊 考古学』103号、雄山閣、2008年
- (20) 『復元大系日本の城』6 中国、ぎょうせい、1993年
- (21) 香川県立ミュージアム所蔵
- (22) 佐伯市教育委員会所蔵。佐伯史談会・緑の会『佐伯の文化財』その1、1985年所収
- (23) 註22参照
- (24) 熊本大学付属図書館所蔵
- (25) 高田 徹「検証天守の防御力 眼下の敵を迎え撃つ最強建造物の実力」『戦国の堅城』Ⅱ、学習研究社、2006年。この文献によると、天守からの火点の範囲は、本丸はおろか、二の丸など殆どの城域をカバーできると、指摘している。特に二の丸へ進入する際は、天守の1階から4階からの背後を突かれる形で、攻撃にさらさされるとしている。そこで、詰門に架かる廊下橋は天守の死角を補うための役割を果たしていたと、筆者は考える(本文図15②参照)。
- (26) 同志社女子大学教授山田邦和氏の指摘(徳島県教育委員会・藍住町教育委員会主催平成21年度勝瑞学アカデミーの同氏講演「戦国京都の魅力～秀吉と京都～」において)。同図屏風には、様々な階層の住居が描かれており、「花の御所」には檜皮葺、管領の細川氏などの幕府高官の屋敷もそれに準じたもの、一般庶民の住居は茅葺きさらに、身分が低い人の住居には、簡単な板葺きとして描かれている。



上図 洛中洛外図屏風(歴博甲本)に描かれている「花の御所」

廊下橋の場合、堀の上に建っている。そこで、バランスの考慮して屋根瓦以外の素材を用いざるを得なかったと思うが、瓦以外の素材として檜皮葺を圧倒的に利用している点は、本論を展開する上で抑えないといけないと考える。

- (27) 『佐伯藩史料 温古知新録』第3巻・第4巻・第5巻、佐伯市教育委員会、1999年～2003年。
- (28) 「高慶公御手日記写(佐伯)」宝永六年七月十三日条。註27第3巻、368頁所収
斧初めの儀式以外にも、工事関係者に対する祝儀などの儀式に、数回天守台が使用された事が、当史料から窺えられる。

- (29) 「高慶公御手日記写（佐伯）」宝永六年九月十六日条。註27第3巻、379頁所収。

廊下橋に関しては、同年十二月十五日の条に、来年正月11日か2月中旬までに完成するよう、藩主から指示が出ている（註27第3巻、393頁所収）。

- (30) 白峰 旬「豊後国佐伯城の大修築（宝永6年～享保13年）について」『史学論叢』第34号、別府大学史学研究会刊行、2004年
- (31) 中澤克昭『中世の武力と城郭』、吉川弘文館、1999年

表 「廊下橋」の存在が確認される城郭

国名	城名	位置	※4 格式
1	陸奥 盛岡城	二→本	外様
2	陸奥 会津若松城	二→本	外様→譜代
3	越前 福井城	三→二	譜代
4	美濃 大垣城	二→本	譜代
5	伊勢 桑名城	二→本	譜代
6	※1 近江 安土城	本→天	
7	近江 膳所城	二→本	譜代
8	近江 彦根城	二→本	譜代
9	山城 ※2 二条城	二→本	京都所司代
10	※3 摂津 大坂城	三→二	外様
11	丹波 篠山城	三→二	譜代
12	紀伊 和歌山城	外→三	御三家
13	出雲 松江城	三→二	外様→譜代
14	讃岐 高松城	二→本	外様→譜代
15	土佐 高知城	二→本	外様
16	豊後 府内城	外→二	外様→譜代
17	豊後 佐伯城	二→本	外様
18	肥前 島原城	二→本	外様→譜代

※1 推定、※2 徳川期、※3 豊臣期、
 ※4 慶長5(1600)年関ヶ原の戦い以降

凡例

天=天守(曲輪)、本=本丸、二=二の丸
 三=三の丸、外=城外

(例)：二→本=二の丸から本丸

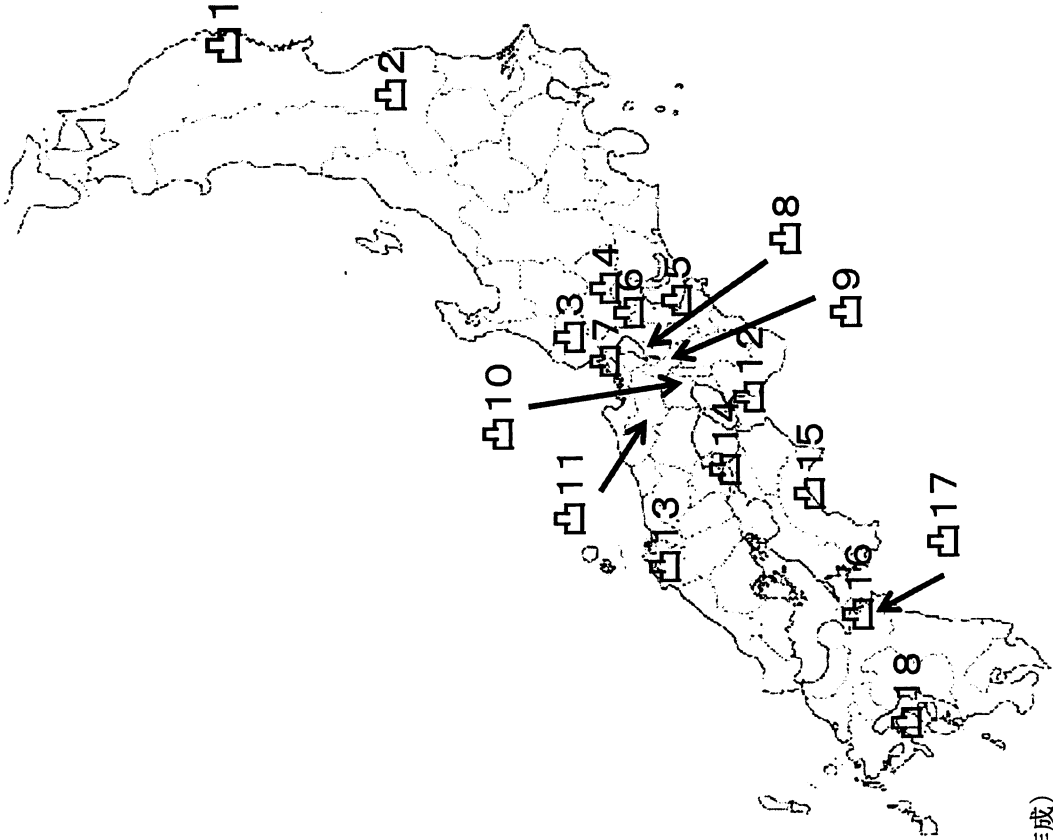


図1 廊下橋が存在する城郭一覧(2010年 福永作成)

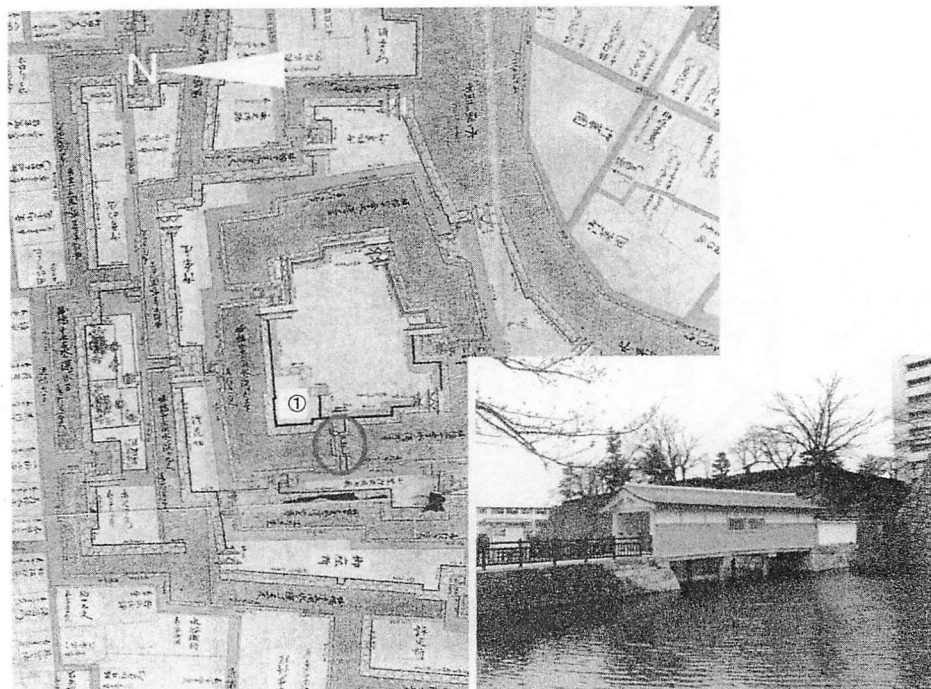


図4 「福居城下絵図」記載の福井城
(図中丸の部分、廊下橋。①が天守台、右下写真が復元されたもの)

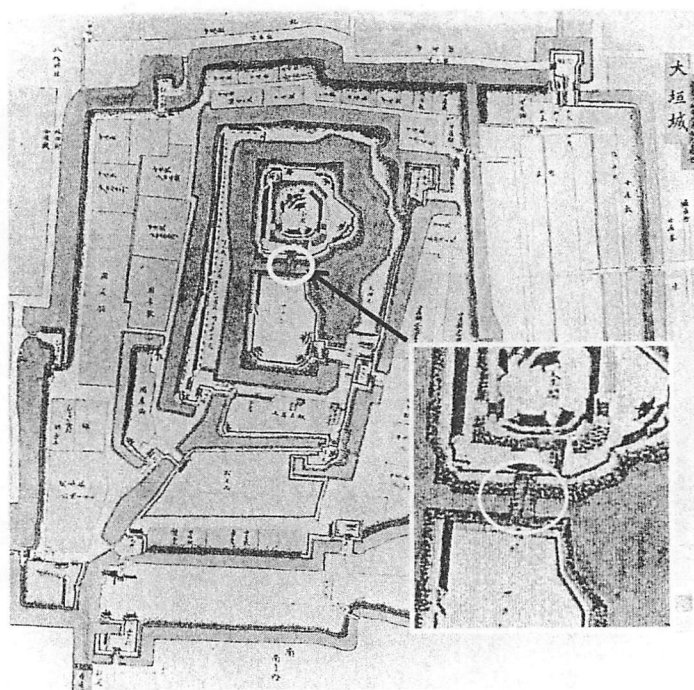


図5 「正保図」の大垣城 (図中丸が廊下橋)

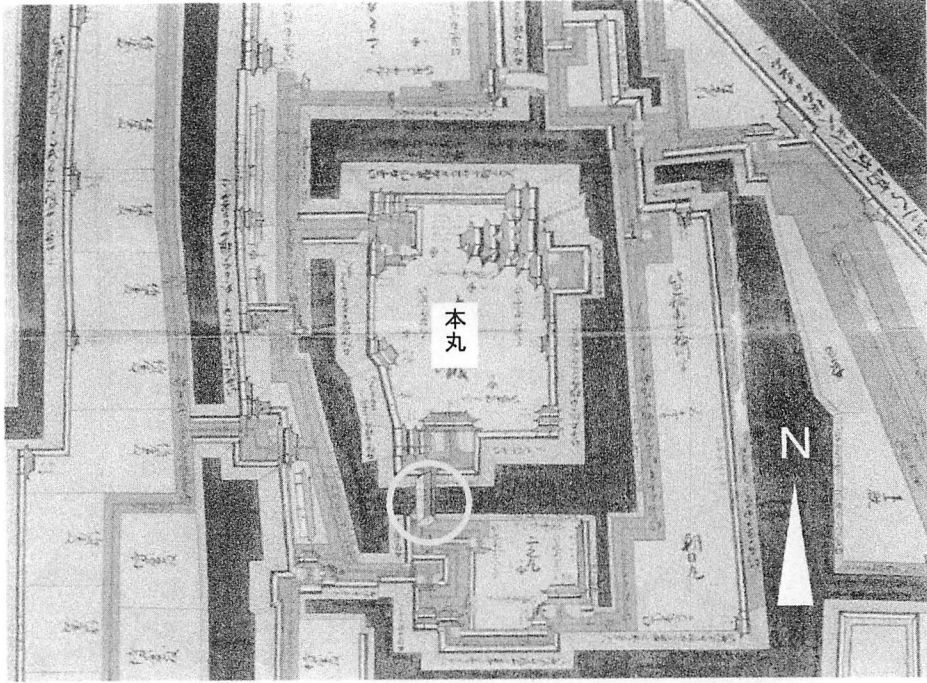


図6 「正保図」の桑名条（図中丸が廊下橋）

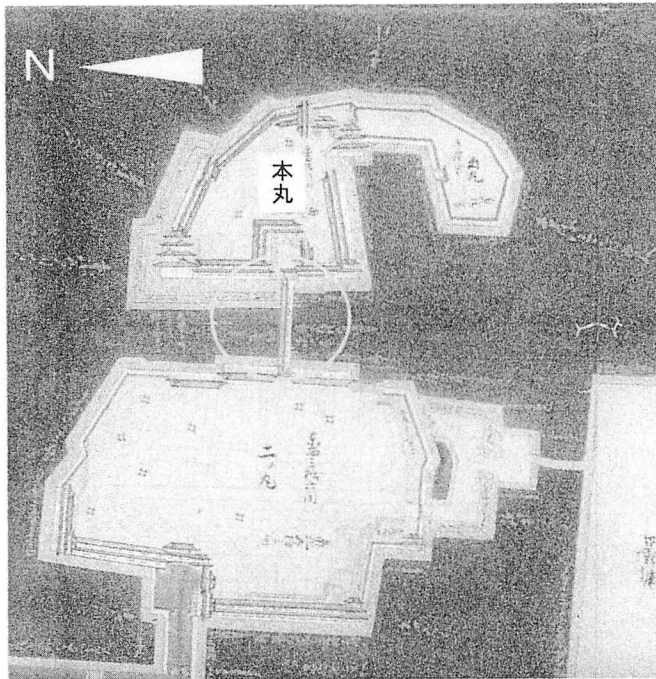
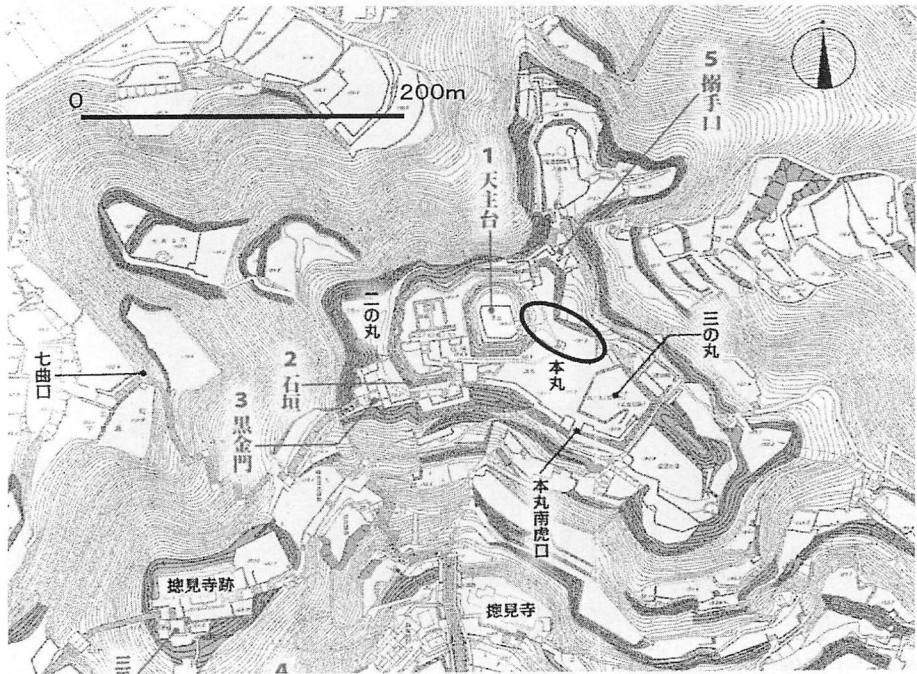


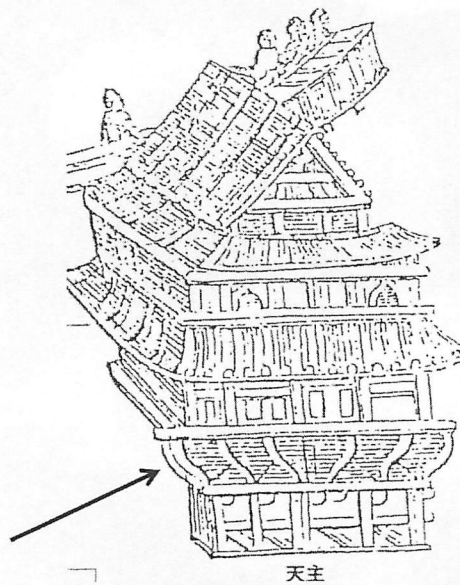
図8 「正保図」（震災前）の膳所城（丸の部分が、廊下橋）

図7 安土城



①安土城全体図

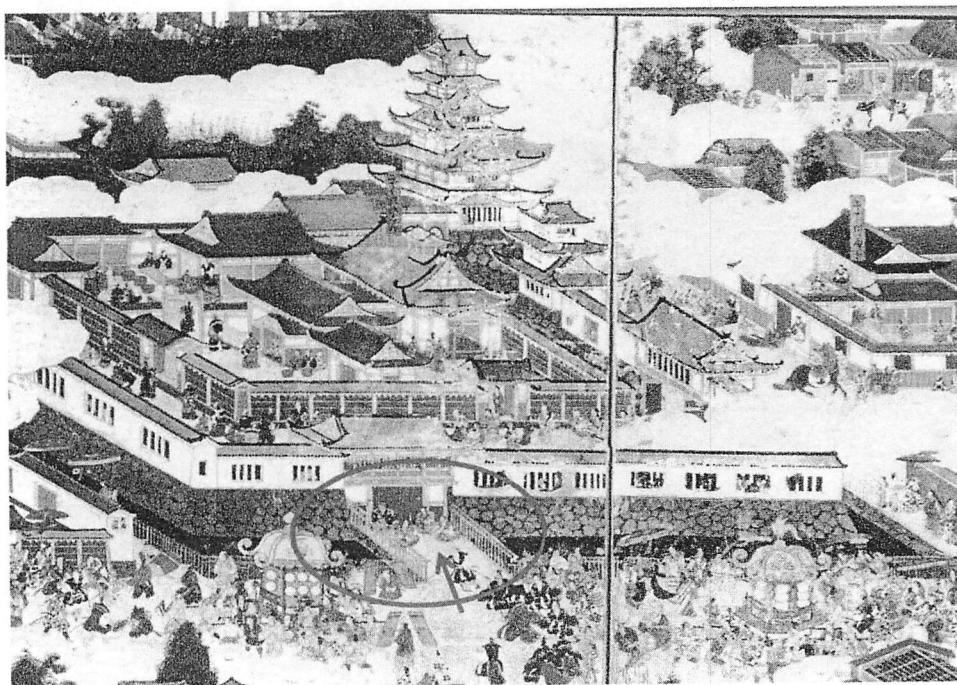
(『名城百選』より丸の部分に廊下橋が付けられていたと思われる箇所)



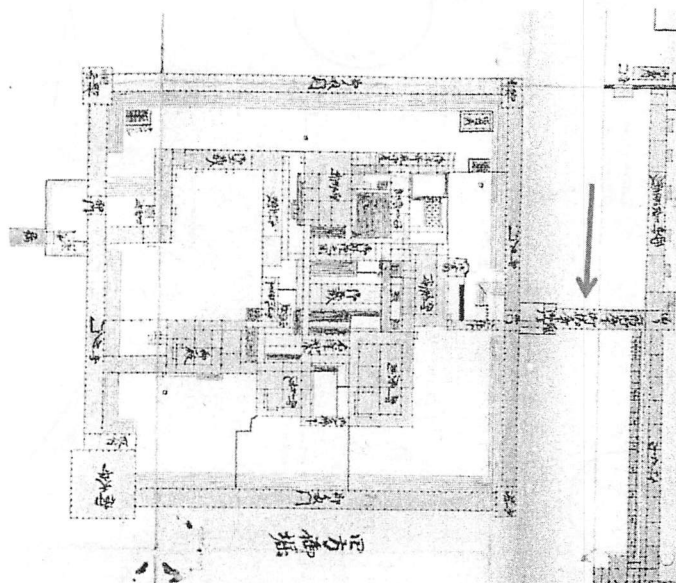
②ウイングが、スケッチした安土城

(矢印が、廊下橋と思われる構造物。註11文献より)

図9 徳川期二条城



①「洛中洛外図屏風（池田家本）」（丸が後に廊下橋が架けられる部分）



②「二条御城中絵図（寛永期作成）」（矢印の部分で、廊下橋がある。）

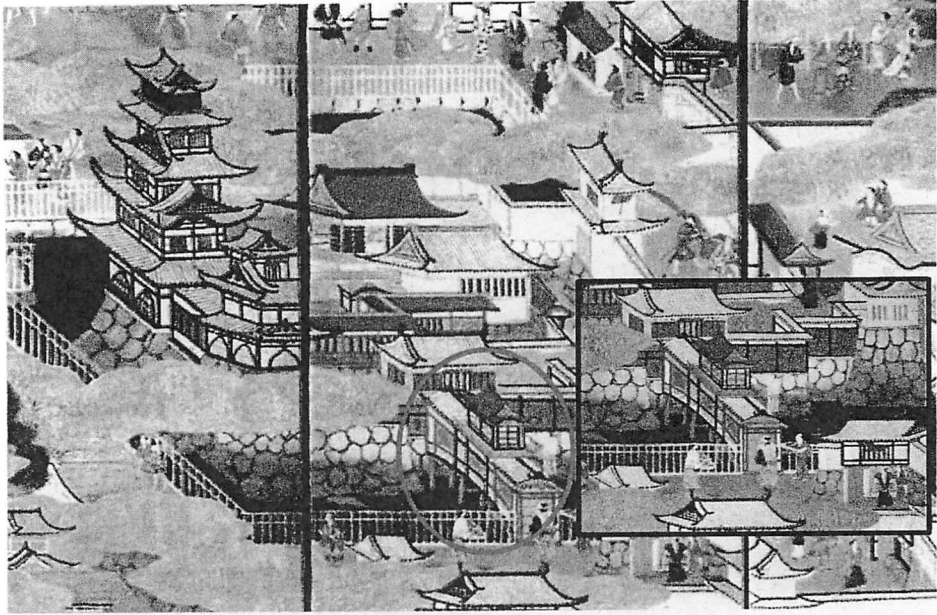


図10 「大坂城図屏風」(丸の部分に極楽橋。右に拡大図)

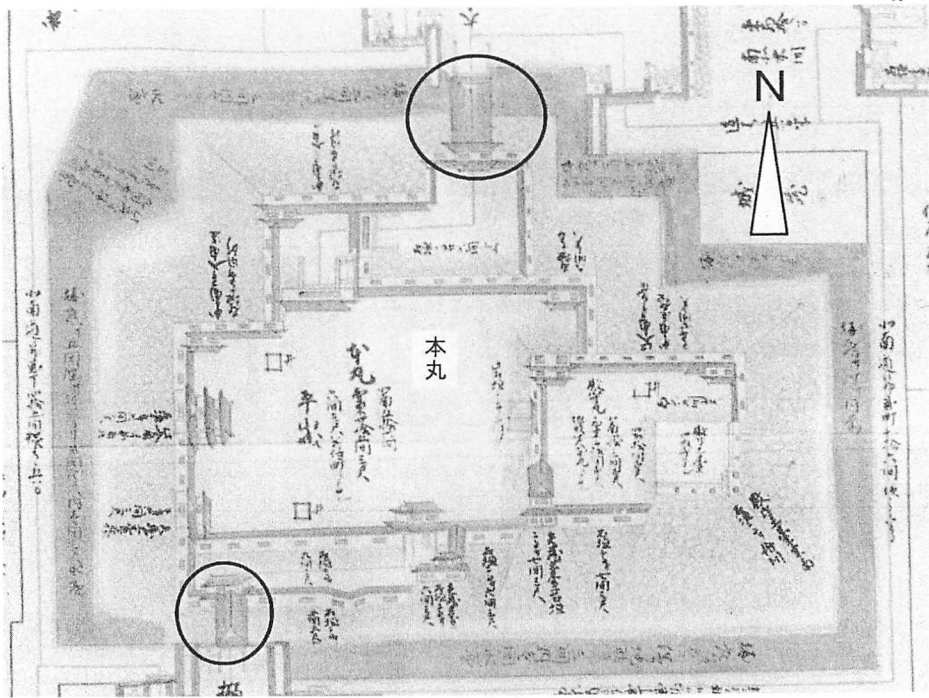
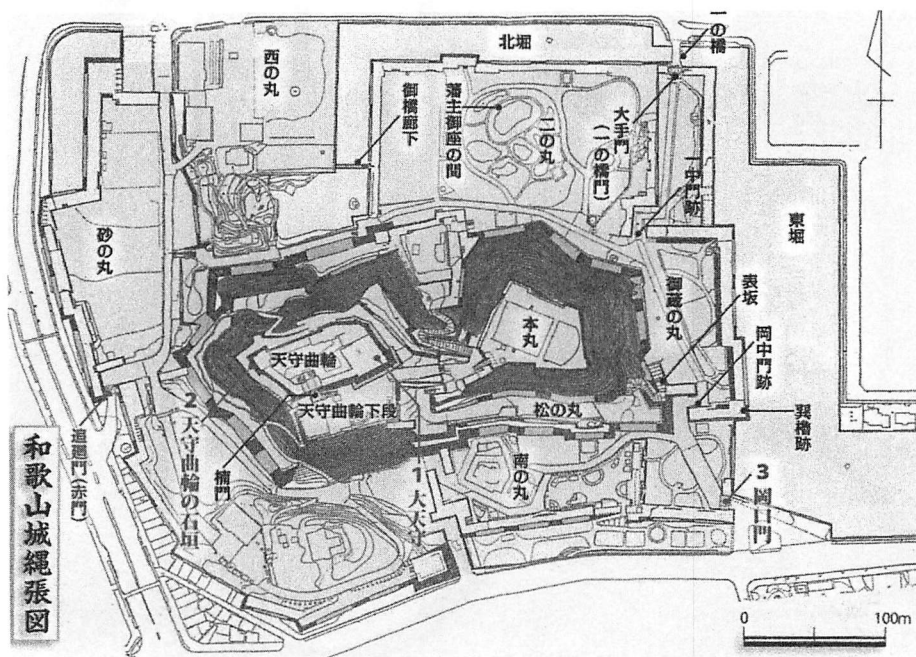
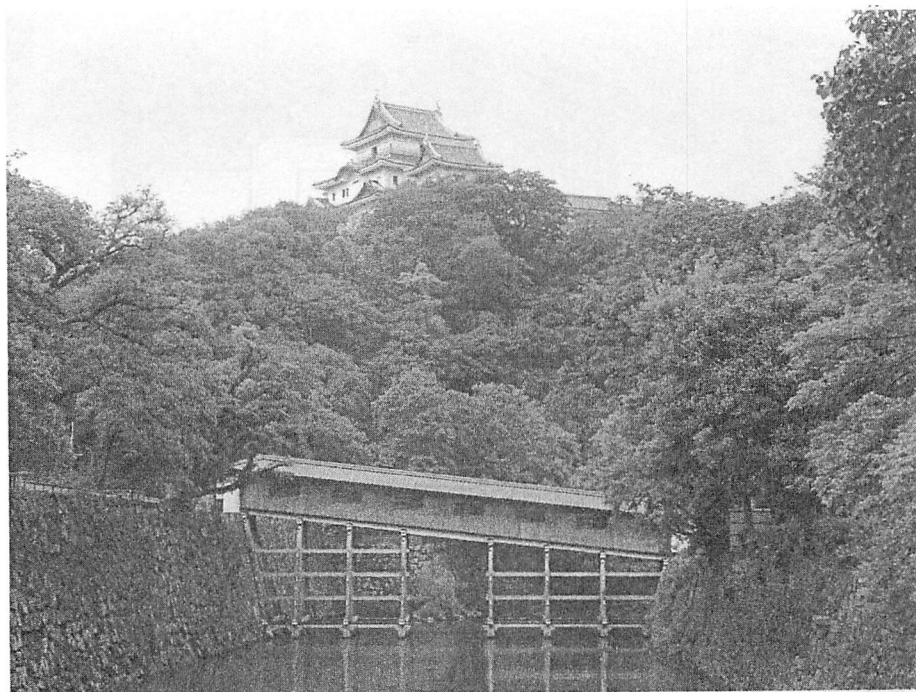


図11 「丹波国篠山城石垣破損之図」(丸い部分が廊下橋)

図12 和歌山城



①和歌山城図（『名城百選より』）



②復元された「御橋廊下」

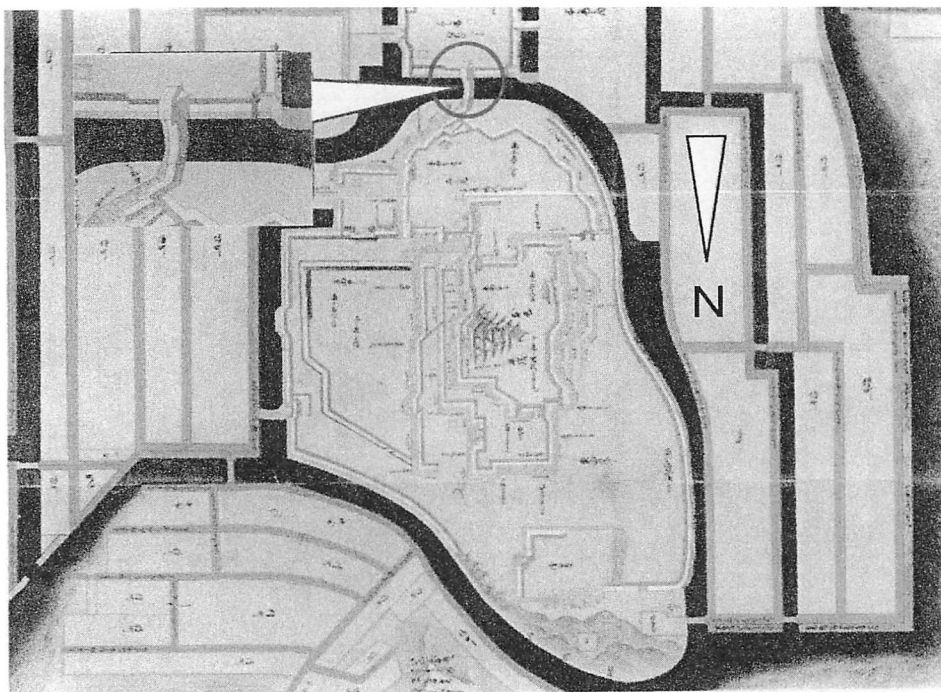


図13 「正保図」の松江城（丸の部分が廊下橋）

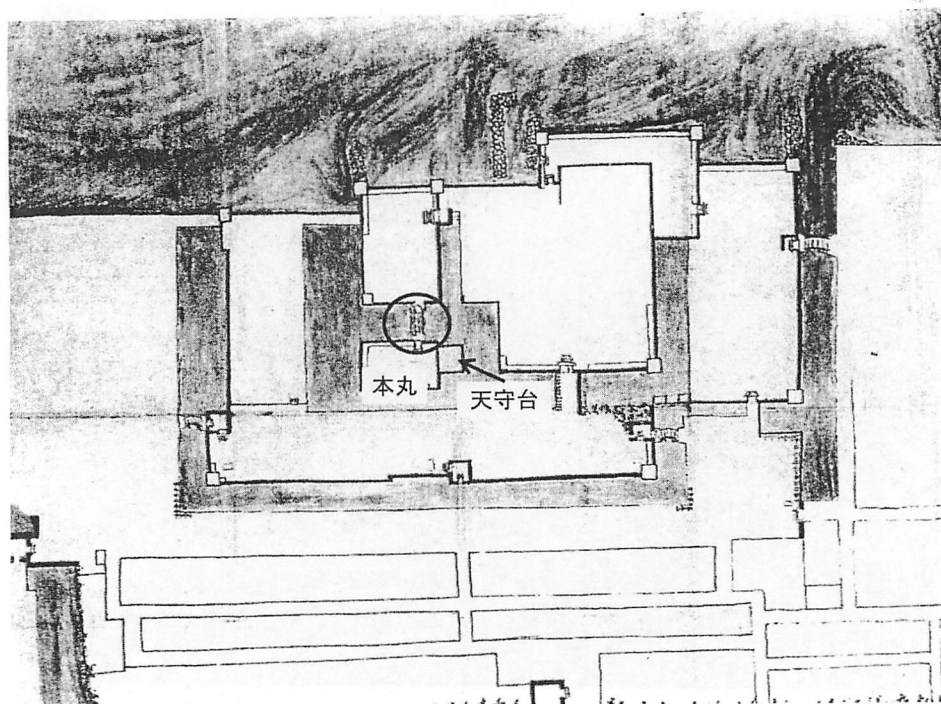
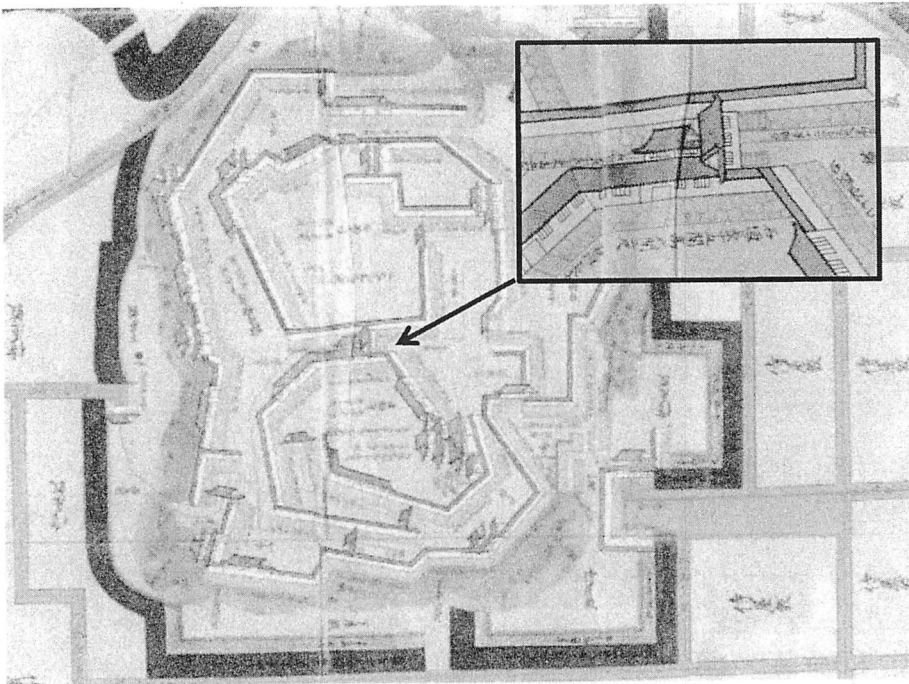
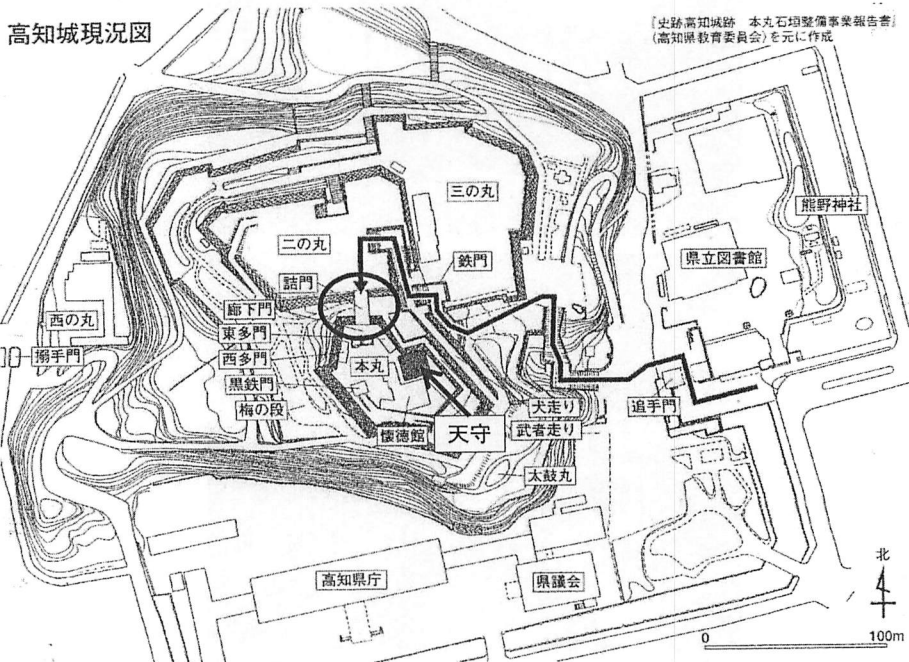


図14 「高松城図」より（丸の部分為廊下橋。上が北）

図15 高知城

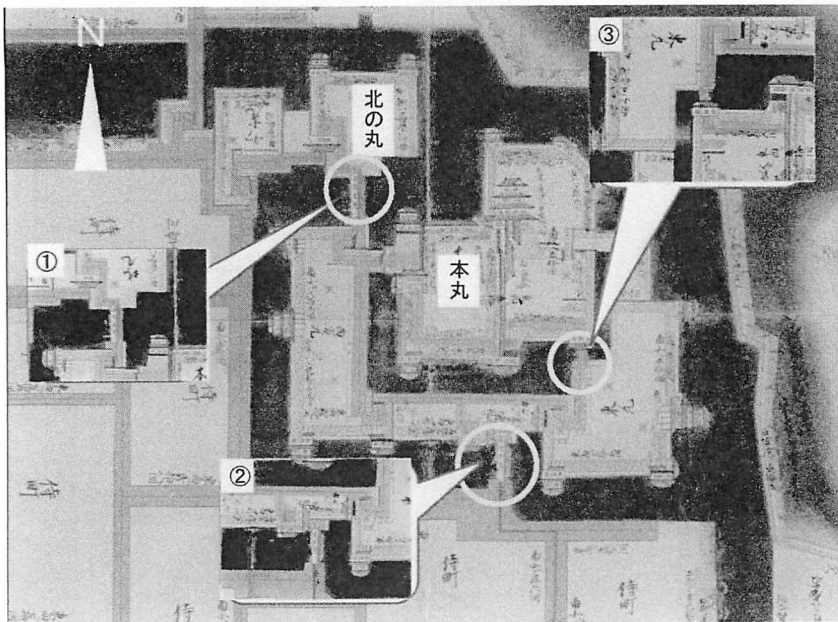


①「正保図」の高知城（拡大部分が詰門）

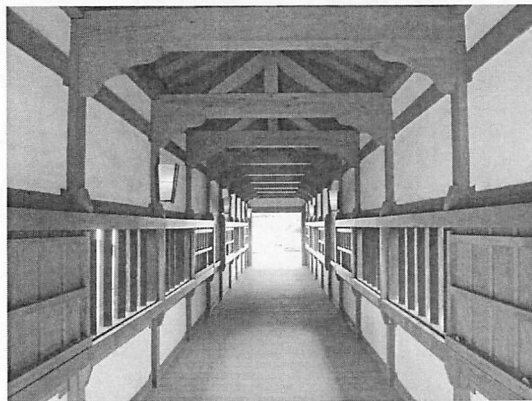


②高知城図（註25文献より、筆者が加筆したもの）

図16 府内城

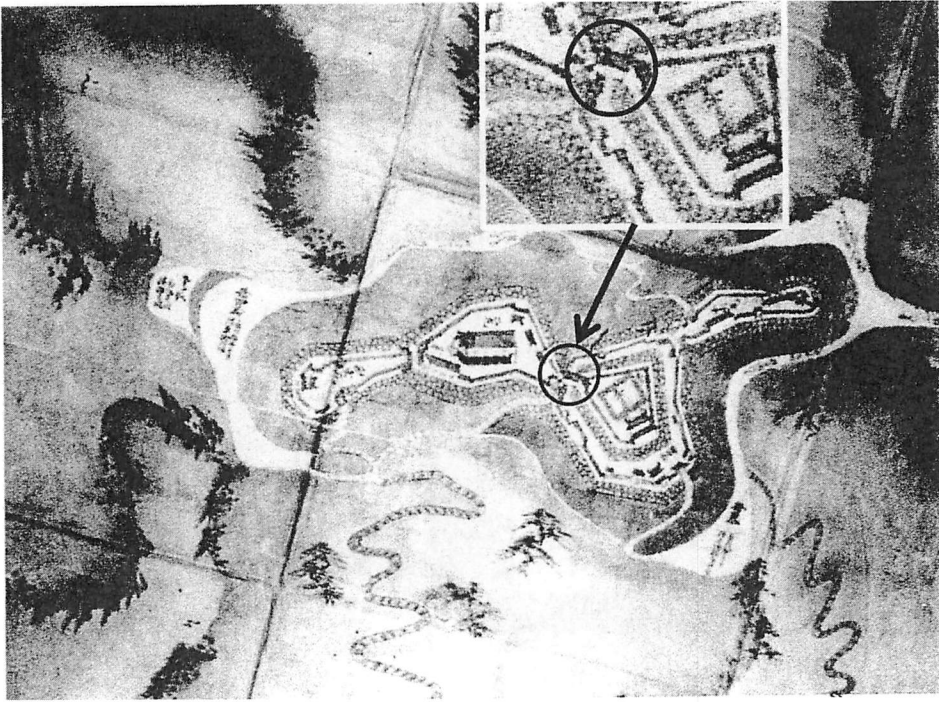


① 「正保図」の府内城と廊下橋



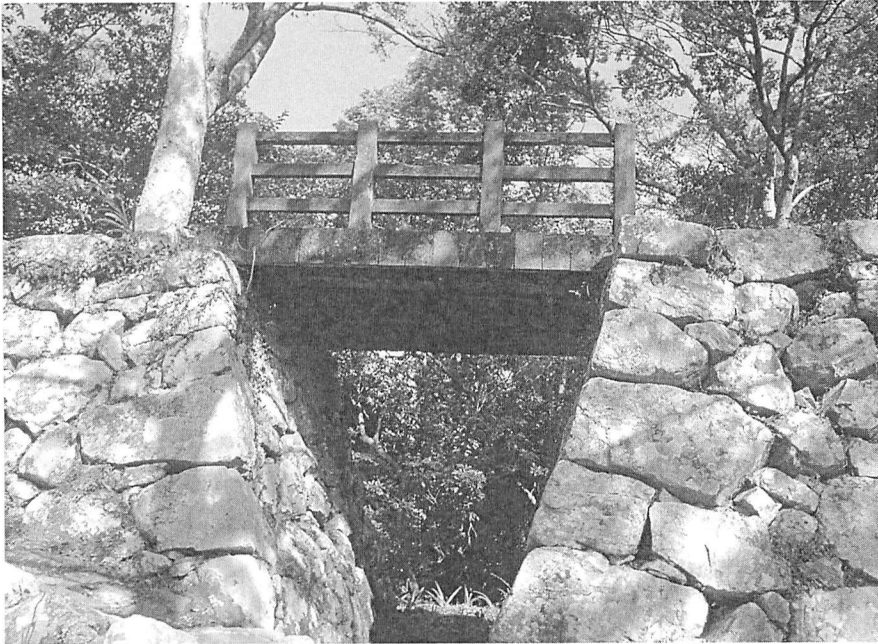
②復元された、北の丸（山里丸）の廊下橋（上）
その内部（下）

図17 佐伯城



①元文3年作成の絵図

(丸で囲まれたところと、上の拡大図は廊下橋。註22文献より)



②廊下橋跡の現況

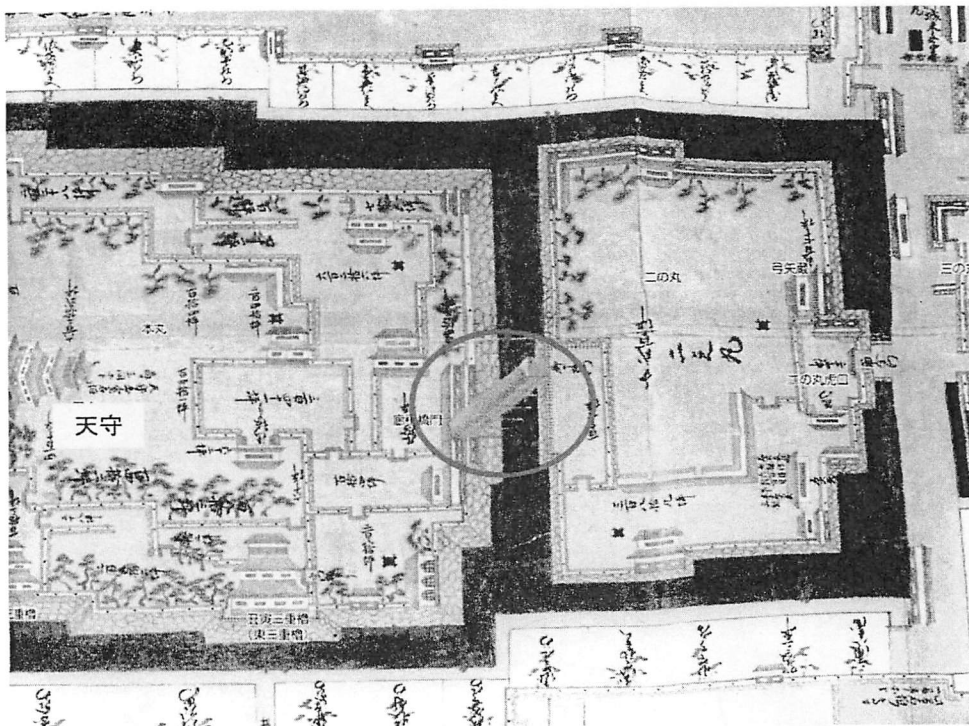


図18 「島原城廻之絵図」

(歴史群像シリーズ『よみがえる日本城』21、学習研究社、2005年より)